

2026年5月31日(日)

老球の細道924

## 5月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 冨仁

28日に術後4か月を経過した。記念に久々のコーヒー。苦いだけで至福の味にはほど遠かった。体重は増えないがウォーキングのみから小刻みジョグも可能になった。後はクリニックができる体力を回復するのみ。目標は力なり。

### 1・読書から

◆「音楽というのは、はっとする心、すなわち、素直に感動する心であると。そして、日常生活の中からそれを発見し、その感覚を常に養わなければいけないと、いつも言い続けていました」〈『目録20世紀・1931年』講談社〉：昭和の大作曲家古賀政男の元養子であった山本丈晴が生前の古賀を語った言葉である。古賀は美空ひばりをはじめとする多くの歌手を育て上げ、制作曲数は4,000曲を越えた。私の通信は1,300。まだまだである。

◆「勇者は一人立つときに最も強し」〈矢内原忠雄著『余の尊敬する人物』岩波新書〉：ドイツの詩人シラーの言葉である。職員会議で皆に反対されながら意見を貫き通した時を思い出す。また次の名言もある「多数とは何か？多数は阿呆のみ、真理は常に少数者にある」。

◆「先のことなど考えずに行動する。これから起こることは、その時に考えれば良い。自分達のふるまいが、天に恥じないことならば、なんとかなるはずです」〈畠山健二著『本所おけら長屋①』PHP文藝文庫〉：昔の教え子から病気見舞いに送られてきた本である。20巻の中のまだ1冊であるが人情、正義、ユーモア、教訓あり。かつて指導者の心を学んだ池波正太郎の『鬼平犯科帳』を彷彿させる。とにかく一步踏み出せばなんとかなる。

◆「人間の運命は、いつも苦しんでいることにある」「肉体は魂に服従するためには頑丈でなければならない」「無知は決して悪を生み出さなかったこと、誤謬だけが有害であること、そして人はなにか知らないためにではなく、知っていると思っっているために誤る」「教育の大きな秘訣は、体の訓練と精神の訓練とがいつもたがいに疲れをいやすものとなるようにすることだ」〈ルソー著『エミール・上』岩波文庫〉：孫の取り扱いを学ぶために読み返した古典であるが、今の私自身にもあてはまる箴言がたくさん見つかった。

### 2・新聞から

◆「『読む』『書く』ことが当たり前の人たちは『話す』ことが分かりやすく、深いのです。読むことによって知識を蓄え、書くことによって考えをまとめ、それを話ことばとして人に伝える。これはどんな分野の仕事でも必要です」〈朝日：若者達へ：南美希子〉：プロ野球の名将、故野村克也監督がいつも言っていた。指導者は本を読まなければいけないと。ミーティング、タイムアウトなどで適確な指示を伝える時も読書量が影響を与えるのではないか。

◆「父のなかに私がいる。ようやく、私のなかにも。あの誇り高い父が頭をもたげ初めた」〈朝日：天声人語：詩人津村信夫〉：60歳で胃ガンによる胃の全摘手術を受け、20年以上生きた父は一度も弱音を吐かなかった。父に負けないよう生きる。父に声が似てきた。